

公立大学法人静岡社会健康医学大学院大学評価委員会
令和4年度第1回 議事録

令和4年7月21日(木)
静岡社会健康医学大学院大学 大教室

午後3時23分開会

【会議開始前】

県事務局より、以下を案内

- ・令和3年12月31日付けで山岡委員（委員長）が退任。
- ・令和4年1月1日付けで小西委員が就任
- ・委員5名全員の出席。会議成立

【議題1 委員長の選出及び委員長代理の指名】

- ・委員長として塩田委員を選出
- ・塩田委員長が中西委員を委員長代理に指名

【議題2 令和3事業年度に係る業務実績の検証について】

- ・県事務局が事業年度評価全体の流れについて説明
- ・法人が実績報告書を説明

< 法人への質疑の概要 >

○委員

S評価となっている入学定員充足率190%に関して、入学した人たちの学力・実績評価は全員が水準以上だったのか。

そして、47名の受験者のうち、不合格となった人たちはどういう人たちだったのか。

また、一般企業からの寄附はどのようなものか。

○法人理事長兼学長

開学を待っていた方が、続々と入ってこられたため、入学した19名は、私どもの想定以上に優れた学生だった。

47名受験したため、不合格となった方がいるが、その中の一部は、科目履修生になり、入学に備えて科目を取られて、その中から数人は今年2期生として入学した。このように非常に意識の高い方が、不合格となった方の中にもいた。

外部資金は奨学寄附金という形で、2件150万円あり、100万円は県内の健康医療関係の企業からの寄附金。

○法人

残りの50万円は、企業から希少疾患の遺伝カウンセリングの質向上や教育活動に使って欲しい、という形でいただいた。

○委員

論文数の評価（No. 27）だが、論文の所属は、静岡社会健康医学大学院大学になっているのか。初年度なので、前所属で出している論文が中心になっている可能性がある。

○法人理事長兼学長

御指摘のとおり、論文数を集計した段階では、所属まで言及していない。初年度で、前任地から引き継いで持ってきた業績が含まれている。来年度以降は必ず所属に本学が入っているものに限ることにしたい。

年間20件の計画に対し、今年度は筆頭著者や代表発表者だけに限っても61件あり、私どもとしては十分だと思っている。ビッグデータサイエンスは、「The Shizuoka Study」という名前で、3年前から県立総合病院の研究サポートセンターでデータを扱っており、それが今結実し、何件か英文論文で入っている。

○委員

静岡での研究がかなり入っていると聞いて安心した。

獲得した外部資金の研究費は全部大学で使えるのか。

○法人理事長兼学長

全部大学で使える。代表者もあり、分担者としてももらっている。間接経費もある。

大学院大学の教員数に比べると、多くの外部資金を獲得している。

○委員

入学生の背景と研究テーマを見ると、静岡県での入学ニーズが非常に高かったと改めて感じた。

そして、研究テーマを見ても、卒業してから継続できる研究テーマを持っている方が多いと思うが、資料には、「講義を聞いて興味を持って研究テーマを決めた者もある」という記述があった。

もともと持ってきた研究テーマと、新たに大学院に入ってから自分で探した研究テーマの比率はいかがか。

○法人理事長兼学長

私は両方あると思っている。多くの方々は、もともと実務経験があり、そこで感じた疑問やシーズを持っていて、そこに新たな疫学や統計の知識と手法を入れて解析した方が多い。入学後、講義を聞く中で新たなテーマを見つけたという方もいる。

○法人

多くの方は、自分の専門領域のことにに関して研究をしたいという意向であった。入学前から抱えていたその領域に関するリサーチクエスションなどを、大学に入って授業を聞いて、具体的に細かいリサーチクエスションに落とし、解析手法を練りに練って、今その研究に取り組んでいるところであり、全ての学生は、本学に入ってから始めた研究と言って差し支えないと思う。

○法人理事長兼学長

多くの医療専門職の方々は、いろいろなデータを既に持っていて、疑問を持っている。ところがどういう手法でやればこれが解析できるのかと、次の一歩がなかなか踏み出せない。この社会健康医学という研究手法を取り入れることによって次の一歩が踏み出せる、という流れがあるように私は実感をしている。

大学院大学は修士課程だが、既に医学博士を持っている方が複数来ている。従来のacademicなdegreeではなく、もっとprofessionalなdegreeとしてMaster of Public Healthを取りたいというトレンドがあるように肌で感じる。昔はあまりなかったが、今の医療専門職は、今ちょうど時代の潮目を迎えており、そこにコロナもあり、私どもの大学ができて、うまくその時流に乗りつつある、と私は自己評価している。

○委員

非常にニーズの高い、もともと潜在的にニーズのあったところに対して、県の事業が執行されていると感じた。

入学定員充足率が190%あり、要望があるということだと思うが、充足率が高過ぎるがために、交付金なり補助金なりが減額されるようなマイナス要因などはあるのか。

○法人理事長兼学長

確かに定員10名で19名というのは非常に多いが、私どもの大学は、スペースは設置基準の5倍ほどあり、教員数も、本来12名いればいいところを私も含めて21名もおり、かなり余力がある。19名入学しても教育研究は十分できると考えている。

文部科学省からは学部で定員を超えるとかなり厳しい指摘があるが、大学院はそれほど強くないと聞いている。

○県事務局

県の運営費交付金等については、定員数による減額等の規定はない。

○委員長

学生当たりの運営費というのは特に増えないのか。

○県事務局

特に、学生1人当たり幾らというような形ではない。

○委員長

今の質問に関連して、開学初年度だが、教員の方々から「もっと学生が欲しい」という意見はあるのか。指導のキャパシティーはあるのか。

○法人理事長兼学長

もっと学生が欲しいという声はあまり承知していない。

私どもの大学は学部がない。学部の教育の負担がないことは非常に大きく、教官の研究に徹することができる。時間的にも物理的にも、いろんな意味で十分キャパシティーがある。

○委員

静岡県が全面的にサポートし、地域コホートをやって、県立総合病院がいて、健康寿命を伸長させるという目標もある。条件がそろっているので、ぜひ進めていただきたい。

入学者の進路についてどう見込んでいるか。

○法人理事長兼学長

院生は、1期生は全て社会人。勤務しながら週末だけ大学に来ている。私どもの意図としては、もともと医療のフィールドに勤務していた方々が修士を取ることによって一層レベルを上げて、また元のフィールドに戻って、そこのボトムアップを図る、ということが目標になる。ただ、博士課程をつくるので、そこに進学して、将来アカデミックなコースに進みたい方も出てくると思われ、今後の行き先はますます多様になると思う。

○委員

予算について伺いたい。10名から19名になったときは、「元々20名のキャパがあり、固定費等は変わらないから大丈夫」という話だったが、これからさらに学生が増えた時、予算的な問題は生じないか。

○法人理事長兼学長

学生指導面では問題を感じていない。

私どもの研究は、医学の中でもデータを使う研究で、あまりお金がかからない。一番経費をかけているのは伊豆のゲノムコホート研究だが、それも想定範囲で収まっている。委員が心配されるように、人数が増えたとしても、経済的な面から私どもの教育研究環境を圧迫されることはない。

○法人

主な運営経費として、教員人件費が非常に大きな割合を占める。今度、博士課程を設置するに当たり増員するが、「学生数が増えるので教員を増やす」わけではないので、大きな人件費のところは変わらない。

教育費についても、教科書等も貸与しているので、若干その辺は増えるが、キャパや設備は十分もともとの設備で対応でき、改めて増やさなければいけないような状況ではない。十分な運営費交付金を県からもらっており、今の学生数が続いたとしても予算面の心配はないと考えている。

○委員

人件費について、予算に対して執行率にかなり差があるが、要因は。

○法人

「どういう人が教員として来るか」という点が分からなかったため、余裕をもって予算を試算していた。

○委員長

大学開設の初年度としては、全体的に大変よく実績を上げられていると思う。

理事長兼学長として、苦勞した点、特に留意している点はあるか。

○法人理事長兼学長

設立までの過程は非常に苦勞した。

前例のない大学院大学で、文部科学省からも「学部のないところに大学院だけつくるのか」などと言われた。また、「医学」という名前を医学部がないところにつけたのは

初めてで、「『保健』『健康』『医療』などにしなさい」と言われ、大分苦勞した。

開学後は、やはり慣れていないこともあって、いろいろなことが起った。先ほど説明があった学生との懇談会でも、最初の1回目はいろいろな不満が来た。それを全部逐一学んで直したので、その後の懇談会では不満はほとんどなくなった。

前例がないこと、今まで私がいた環境とは随分違うことから、ギャップに悩んだことはある。まだ問題はいくつか残っているが、順調な船出をして滑り出していると理解している。今後、3期生、4期生を迎えて、研究もどんどん発展して、もっともっと実り多ければいいと思う。

また、一番心配したのは定員割れ。一時は夜寝られないほど心配した。1期生でこんなにたくさん入ったとき、私は本当にうれしかった。

○委員

非常に順調な運営をしていると感じる。

広報も、非常にいろいろな工夫をされている。先日は小学生を対象にした大学院の見学で、研究に対する興味を持たせる取組をしていたりと、県民目線で運営していることを非常に高く評価をしたい。

また、学生との懇談会を非常に大事にし、学生目線での運営ができています。

それから履修生にまで広げて個別面談している。そういった努力が学生数に返るだろうと思う。

本当に多様な背景を持つ学生たちの中で、様々な疑問や悩みもあったと思うが、先ほどの学生から出た不満の中で、一番改善したところは何か。

○法人

今年のちょうど今頃、前期前半が終わったときに学生との懇談会を実施した。

学生からの一番の要望は、「授業の課題の出し方であるとか課題の締切りを、はっきりさせてください」だった。私どもの大学では、皆さん社会人で、金曜日と土曜日に仕事を調整して来ていた。日曜日はお休みだと思うが、月曜日からすぐ業務が始まるため、時間の管理がかなり難しいのだろうと実感した。

「授業の資料は1週間前に出す」「課題は授業が終わったら速やかに出し、1週間程度の期間を置いて報告をしてもらう」といったルールを教員と学生の間で共有した結果、満足度が非常に高くなったと思う。

○法人理事長兼学長

本学は最初からITを駆使した。授業もオンラインやオンデマンドがあり、出席から何から全部オンライン。最初は戸惑ったが、使えば非常に便利。ITを駆使したことが、働きながら研究を続けられる、駆動力の一つになっている。

広報も大事。バス停の名前も大学を加えた。小学生の校舎見学も実施した。駅前にポスターを掲示した。

○法人

広報については、県民の皆さんから見て活動が見えやすいものが必要だと考えている。小学生の校舎見学のように、どういうことをやっている大学なのかというのを、ぜひ見てほしい。

研究に関しても、県の委託研究などで結果が出た際には、今後もホームページ等を通じて、県民の皆さんに分かるように広報していきたい。

○委員

ゲノムコホート研究について伺いたい。静岡はいい地域で、世界に発信できるデータが出る可能性があると思って期待しているところだが、ゲノムコホートで何を明らかにしていきたいのか。認知症や生活習慣病等、色々考えられるが、現時点ではどのように考えているか。

○法人理事長兼学長

ゲノムコホートを行っている教授は、京都大学で10年間「ながはまコホート」を実施してきた経験がある。「The Nagahama Study」の論文が随分出ている。3トントラックで健診道具を運んで伊豆まで行き、3日間泊まり込んで健診をする、という膨大な作業をする中で培ったノウハウとデータが論文になるという世界。

特に、最初に一番困難な賀茂地区を選んだ。一番の遠隔地であり、コロナもあって苦労した。来年からコホートを広げる予定。今後、2万人を目標に東部、中部、西部と分けて広げていく。ゲノムと、認知症やフレイルといった従来の健診にない項目を入れ、さらに我々のビッグデータと紐付けすることにより、今までにないデータが出るのが私の夢。実らせたいと思っている。

○法人

ゲノムコホートでやりたいことは、今私たち人類が抱えていてまだ解決していないこと、特に認知症、フレイルといった、人類が高齢化してきたことによって初めて顕在化してきた課題について取り組んでいきたい。

ゲノムに限らず、血液中の微量な分析など、いろいろな分析がどんどんできるようになってくると思う。新しいテクニックを取り入れて、今分かっていないことに取り組んでいきたい。

もう1つのコホートのメリットは、体制として、いろいろな人が入り込み、分野を超えて一緒に研究ができるところ。

今、経済産業省の外郭団体の経済産業研究所から先生が来て、社会経済因子の研究をしている。県内では、私どものコホートを中心として、県立大学、それからその短期大学部、それから常葉大学などとも協力して一緒にできるようになった。

また、変わったところでは、静岡文化芸術大学の先生に賀茂地区のコホートのアイコンを作っていたいたり、アイコンを元にスタッフジャンパーや封筒などを作るようにした。デザインの力というのは人を動かす上で非常に大事だと思うので、メディカルの先生だけでなく、そういったデザインの方などとも協力し、静岡県のいろいろな人たちがこのコホートをハブにして、拠点として集まることで、今までできていなかったことに取り組んでいきたい。

○委員長

大変夢のある計画で、成果を出されることを期待している。

○委員

データがこれからたくさん集まってきて、その協力体制も出来始めていて、大変いいことだと思う。

データの解析の方法は、日進月歩で、多岐にわたっている。専門家の育成として、専門家を指導する専門家は、どのようにそろえているのか。

○法人

疫学研究のデータを解析するときには、比較的クラシカルな解析方法でやることが多く、あまり特殊な解析方法を使わないのが一般的。学生を指導するに当たっても、統計的に複雑なモデルを使うというよりも、「どうやったらこのことが解明できるのか」というデザインをpushすることが第一歩。

ただ、ゲノムであるとか血液中の非常に微細な物質の分析は、古典的な方法ではなく、新しい方法を取り入れていかなければいけない部分がたくさん出てくる。そこは、恐らく世界中今手探り状態でやっている。世界の仲間と協力しながら、いろいろなノウハウや技術を取り入れて、自分たちでそれができるようにし、それを学生の教育にも転化し

ていきたいと思う。

- ・ 法人へのヒアリング終了、法人関係者退席
- ・ 令和3事業年度に係る業務実績に関する検証に関する事務局説明

○委員長

本委員会としては、自己評価と事務局案に基づいて最終評価を決定する。

評価のポイントは2つ。1つ目は、法人の自己評価からの評価を変更すべきかどうか。2つ目は、業績について「よく頑張っている」と評価したり、「さらに頑張してほしい」とエンカレッジしたりする意見を付けるかどうか。

事務局案で自己評価を変更しているのが「入学定員の充足率」。定員10名で19名入学した中で、法人はS評価だが、志願者が多かった、募集活動を積極的にやった、ということも含めてSS評価に変更しては、という案となっている。

御意見いかがでしょうか。

○委員

私もSS評価が妥当だと考えている。

自己評価が数だけの問題ならば、定員数をはるかに超えているわけで、SS評価と思う。数だけではなくて、大学のポリシーに見合った期待する人材といった面も考慮して、自己評価をS評価にしたのかと推測していたが、大学院側が期待する人材に申し分ないという説明もあったので、入学者の数と、質と、両方考えても、SS評価でいいのではないか。

○委員

「超過に関するデメリットはない」という話だった。収入もプラスになるので、よろしいのかなと思う。

○委員

賛成。社会健康医学は、放っておいたらそう簡単に学生が入る大学院ではないと思う。相当広報されて魅力を伝えたことによって、これだけの応募があって、19名の入学者となった。普通だったら応募者数が定員を切ってもおかしくない中、これだけの人を集め

たのは、本当に素晴らしい成果で、努力のあらわれだと思う。

○委員長

大体SS評価で良いという御意見です。

私の心配の一つは、年度計画に「100%」ということを書いているが、質は書いていないということ。もう一つは、ここでSS評価を付けて、後でS評価となった際に問題になりはしないかということ。

○委員

業績を最初から良い評価にすると、だんだん落ちてくるように評価される。

県としての御意見はいかがか。議会がどう見るのか等、静岡県独自のところもあるかと思うが。

○県事務局

この成果でS評価とするとなると、「来年度はA評価にしないといけないのでは」「どこでSS評価をつけたらいいのか」といった面が心配になる。

○委員長

「initiation effect」「大変頑張った」ということで、SS評価でよいか。

(全委員、承諾)

「連携協定の団体数」の項目で、「賀茂地域1市5町を1団体とカウントする」としているが、これは特に問題ないと思う。

「交流協定締結」の項目は、0件ではあるが、協定を締結するために着実な準備を進めているとして、法人の自己評価・事務局案ではA評価としている。

御意見いかがか。

○委員

初年度で、継続してのものではないので、大変だったと思う。また、コロナでフェース・トゥ・フェースで会うことが難しい状況であったことを考えると、今の進捗状況で問題ないかなと思う。

○委員長

A評価でよろしいか。

(全委員、承諾)

他は大体「A」評価、論文と外部資金の獲得が「S」評価で、法人の評価と事務局案が一致している。

○委員

論文が20件の目標に対して60件出ている点について伺いたい。「論文がこんなにたくさん出るのか」という驚きと、目標で定めてはいるところではあるが、そもそも論文は件数でカウントするものなのかという疑問がわいた。他委員の御意見を伺いたい。

○委員

論文の数は評価の1つになると思う。また、どれだけ評価の高い論文が出ているかというのを調べようと思うと、一個一個の論文のインパクトファクターという指標がある。1個1個の論文の点数を、「Nature」等の影響力のある雑誌に掲載されると高くなる、といった方法で出す。

○委員

論文ごとに賞の大きさが違い、その賞ごとに点数を付ける、といった話が出る可能性もあるわけですね。

○委員長

このような御意見もあるので、「論文の質的な向上・分析をすること」という意見を付けてけてもいいかと思う。

午後 5 時00分閉会